唐突(サカド)な、とはどういうことか？ その動作に思わず飛びつくことである。怖じけづいて、あせってしまい、がっくりときて、いらついた動作に飛びつくこと。とりあえず動かなければならない。でないと人が不審に思い、疑わしい目を向ける。疑わしいときは沈黙を守れ。これこそ疑わしい諺だ。というのは、取り繕うためには動かなければならないからである。周りではあらゆるものが動いている。自分が止まっても、他は止まらない。止まれば何かわけがありと思われる。何もしないことが一つの動きになってしまう。これは目立ってむしろ害となりえる。適切な動きも、機を逃すとかえって悪い結果となる。とりかえしがつかなくなるよりはと、どんな動きでもとりあえず選ぶことにする。だからといってあまりにも異常なことをするわけにもいかない。ここで考える必要が出てくる。だが、考えている間に時間がたつ。しかも、火はあまりに速くそこまでやってきている。わたしたちの理性はのろくて役に立たない。理性的に見れば理性は信用できないのだ。そこで理性は自滅する。つまり理性がなくなるのだ。そのあげく人は動きに飛びつく。もうおしまい - 唐突な動きとなる。実際は混乱の末に身動きできない状態なのである。こんなことをしてよかったのだろうか？ではたった今どうすればいいのか？動きを内在させた不動性を持てばよい。ふちからあふれそうになって、かろうじて止まっている水滴の状態、窓ガラスに止まっている蠅がまさに飛ぼうとしている状態、傾いた旋盤から何かが滑り落ちようとして危うくとどまっている状態。このように人は不動となって、狙う前に弓を引きしぼって矢を放ち、再び動き出すのだ。だが物事の何が唐突な動きを決定するのかを、本当はここで分析し直すべきである - これは衝撃の負担を軽くするための方策であるとか、驚いた時の反応であるとか。

「マイムの言葉-思考する身体」　エティエンヌ・ドゥクルー 1998年　ブリュッケ
p.78-80　相反する二つの動き1952年